

ちんどん文化と子ども 2

ちんどん鈴乃家と手話歌

太田 梢 (近畿大学九州短期大学)

Chindon and Children II - Chindon Suzunoya and sign language song
Kozue Ohta (Kyushu Junior College of Kindai University)

要旨

本論文は、博多を主に活動拠点としている「ちんどん鈴乃家」を研究対象として、ちんどん文化が幼児教育の現場で効果的なアプローチとなる事実と可能性とを検証する。ちんどん文化は、言葉と身体性の密な関連性から子どもに対してパフォーマンス効果を発揮する。今回はその事例として、ちんどん鈴乃家の自主公演で注目された手話歌の考察を行ないたい。

キーワード：ちんどん、子ども、手話歌、言語習得

Abstract

This study examines the facts and possibilities of Chindon culture as an effective approach in early childhood education, focusing on Chindon Suzunoya, , which is mainly based in Hakata. Chindon culture exerts a performance effect on children due to the close relationship between words and physicality. As an example, I would like to examine a sign language song that attracted attention at Chindon Suzunoya's performance.

Keywords : Chindon, ,children, sign language song, language acquisition

1. はじめに

本論は、九州・博多を主に活動拠点としている「ちんどん鈴乃家」を研究対象として、ちんどんの実践が、幼児教育の現場で子どもにとって効果的なパフォーマンスとなることを検証する。今回はその事例として、彼女たちのパフォーマンスの中でも特に「手話歌」に焦点を置く。

ちんどん文化は時代を映す鏡である。現代の広告業の始まりとして江戸時代から誕生したちんどん文化は様態や規模は変えつつも、令和時代まで日本のとある町であり公共空間として存続している。それ故、これまでのちんどんに関する研究は、公共空

間の路上におけるフィールドワーク調査が主流となっている。公共の場所に特定の、さらに言えば唯一無二の特別な空間をちんどんが即時に生み出し続けていくというプロセスについては、阿部万里江による「想像共感 *imaginative empathy*」の概念において分析されている。阿部は自身のちんどん研究の中で、フィールドワークと資料収集から、「ちんどん屋の実践者たちは、彼ら自身が哲学者でありエスノグラファー（民族誌家）」(1)と定義している。自らが時代の観察者となり、その場所とその時に必要なものを紡いでいくちんどんは、広告業から大衆芸能として役割を担ってきたが、共通しているのは、そのパフォーマンスが時代を映しているという

ことである。

ちんどん鈴乃家は2025年より新たな取り組みとして、子どもと子どもに関わる人をターゲットに「ちんどん屋さん体験」と「リトミック」を組み合わせた体験ワークショップ「おまつりとみっく」を立ち上げた。実施場所は、特に2023年以後増えていた祭会場などを例とした公共空間での子ども対象イベントから、保育園や幼稚園などの施設での体験型ワークショップにまで多岐にわたる。取り組みに平行して2025年6月21日よりクラウドファンディングも実施された。支援募集のウェブページには「子どもたちの「夢中力」を育てる！未来への一歩プロジェクト」のタイトルで、「ちんどん屋体験を通じて、子どもたちは「伝えること」「伝わること」の喜びを感じ、音や笑顔が響き合うコミュニケーションの中で、夢中になる力と可能性を育みます。」との記載がある。2025年9月8日時点で支援総額443500円であり、147%の達成率に到達し募集を終了した。(2)

ここからも、現在「エスノグラファー」としてのちんどん鈴乃家が目標としていることが、子どもにちんどん文化を伝えることであり、クラウドファンディングの達成率や保育施設からの依頼を考慮しても、現在子ども及び子どもに関わる環境がちんどん鈴乃家の活動を求めている事実も分かる。「おまつりとみっく」では、練り歩きや南京玉すだれの演目から、「ちんどんとは何か？」を説明する紙芝居、音楽にのせて身体表現をみんなで行ないひとつの舞台をつくる参加型ワークショップが実施された。次の写真は実際のワークショップ時の写真である。



①練り歩きの実演



②紙芝居の読み聞かせ



③楽曲に合わせ布を広げる子どもたちとメンバー

特に鈴乃家が力を入れていた内容が③の身体表現を音楽にのせて行なう部分であった。このプロセスはまず楽曲を子どもに聞かせ、その後、メンバーがゆっくり歌詞の中の印象深い単語を反復し、その単語を表現する方法をメロディやリズム、この日は色とりどりの布を使い具体化していった。その過程を経て、集まった子どもたち全員で楽曲を身体表現で披露する流れであった。この過程は後述する手話歌を子供に教える過程と類似しており、手話歌の試みが「おまつりとみっく」の伏線としてあったことを裏付けた。よって、今回は検証事例を手話歌とその実践者にさだめ、実践者側のライフストーリーインタビューとフィールドワークの方法を採用した。

2. 楽曲「花は咲く」と自主公演演目「花は咲く」

2023年9月、太宰府市のまほろばホールで初の自主公演に成功したちんどん鈴乃家は、翌年2024年同月、第2回自主公演を行なった。チラシを片手に太宰府参道を練り歩く余興から、ホールでの本公演に至る過程は、日本における初の宣伝業として「歩く広告塔」という別名の通り、街中を情報片手に練り歩く形態として誕生したちんどん本来の、宣伝業という職業から、自らを宣伝媒体すなわち鈴乃家自体が「伝えたいもの」とすることで、現在のエンターテインメント性の強い大衆芸能の一

形態を表現する過程を経た。口上や演奏、練り歩き等の大道芸としての技術は、ステージ上では歌唱や舞踊も加えられた総合芸術として完成した。

その興行の中でひと際観客の目をひいた演目が、本論の対象となっている「花は咲く」であった。公演での「花は咲く」は子どもたちと鈴乃家メンバーによって披露され、メンバーのひとりが歌い、他の演者は手話歌を披露した。

ここで楽曲「花は咲く」に触れたい。本曲は2011年3月11日に発生した東日本大震災のチャリティーソングである。震災後、各メディアは復興事業としてメディア・キャンペーンを実施し、チャリティ活動を行なってきた。その中で、NHKが立ち上げた震災支援プロジェクトのテーマソングとして制作され、翌年に発売された曲である。オリジナルは、東北にゆかりのある歌手やアスリートが「花は咲くプロジェクト」名義で歌っているが、多くのカバーが国内外でされている。認知度の高い曲として、日本に住んでいる、もしくは日本に関心がある人であれば一度は聞いたことがある一曲である。この有名な曲を鈴乃家は手話歌として子どもたちと共に披露し、会場をひとつにした。



第2回自主公演で「花は咲く」を披露する演者たち

上の写真は第2回自主公演の際に手話歌として「花は咲く」が実演された際の写真である。左から2番目の人物が手話歌の指導担当メンバーである野中真由美氏で、彼女は現在おまつりとみっくの実行メンバーの代表でもある。上の写真からは、野中

氏が手話をし、ステージ上の子どもたちそれぞれも曲に合わせて、手話歌として演目を披露している様子が分かる。

練習時に参与観察した際には、野中氏はまずオリジナル曲を流し、「真っ白な雪道」「あの街」「愛おしい」など歌詞を言葉として反復し、それに合わせた（その言葉を意味する）手話を子どもたちに示した。その後、子供たちは指導役の野中氏がアカペラの歌を歌いながら手話のジェスチャーをする姿を、模倣する作業を行なった。その模倣をメロディにのせて反復することで、各々が歌詞の内容や仕草もしくは手話の所作全般に対して、野中氏の示した意味を解釈するための意味付けを行っていた。

ここで留意しなければならないことは、練習の時点で100パーセント正確な手話を完成させる子どもはいなかったことである。野中氏が子ども達に伝えたいことは、手話というひとつの表現への理解ではあるものの、手話の技法を習得することではなかった。さらに言及するならば、自らパフォーマンスし楽曲の意味を解釈していく中で、チャリティーソングに込められた例えば希望や支え合いに通じる言葉から生み出される「共感性」や「連帯感」といった感性という抽象的なものを、自分なりに理解し心をこめて伝えることに指導が集中していると認識した。指導を受けた子どもたちは、「あたたかい」「なみだがとってもでる」「はなはどんな色だろう」「なにをのこしたいかなあ…」など、感性を刺激され多種多様な言葉を紡いでいた。

鈴乃家女将の新井理恵子氏は3月に行なった質問紙調査の中で、ちんどんと手話歌「花は咲く」の関係性を次のように述べている。

【心】を伝えるという、現代のちんどん屋としての使命を明確にしてくれた曲で、自分にとってアーティストである自覚を持つことができ、ちんどん鈴乃家で取り入れることがターニングポイントとなりました。現代の宣伝屋として宣伝すべき内容は**【心】**だと考えます。「花は咲く」は震災を忘れない、人として大切にしたいこと、命ある今を楽しむ、そんな**【心】**を伝えるのにぴったりな曲です。

以上の発言からも、手話歌「花は咲く」は現代の

ちんどん屋として鈴乃家が芸能の1形態として存続するための転換点となった重要な1曲であることが分かる。

ただし、先に指摘した正しい手話の伝達に関しては鈴乃家の次の課題ともなっていたことは後述したい。

3. 手話歌とちんどん鈴乃家

3-1 手話歌の現状

耳が聞こえない人の言語としての手話は、手話歌として近年ブームを巻き起こしている。2025年現在、学校という教育現場から習い事といった趣味の現場に至るまで、手話歌は紹介されるようになったが、まずそのブームに火をつけたのはインターネット上の動画投稿サイトであろう。インターネット上において、手話歌は多数公開されている。手話歌を通して、手話自体のみならず耳が聞こえない人への関心を持つ人も増えている。手話歌は確かに手話の普及に貢献している。さらに、曲の歌詞を聞こえない人にも分かるように手話で表現して歌うという意図だけではなく、耳の聞こえる人も聞こえない人も一緒に音楽を楽しめるように、「目で見える言葉」で歌を表現するという意図に手話歌の定義は拡大している。

1989年より日本においていち早く手話を舞台上のセリフや歌に取り入れた「手話パフォーマンスきいろぐみ」の代表である南瑠霞が自著で「どちらが主でどちらが副といった言葉の優先順位はない。手話も音声も、どちらも大事なセリフであり歌声だ。」

(3)と論じているように、手話はひとつの言語である。2013年に鳥取県が日本で初めて手話言語条例を制定したことは、「手話を公式に「言語」として認めた日本初の条例」としてきいろぐみのホームページ上で取り上げられている。現に鳥取県の条例制定を皮切りに日本各地で手話を言語として取り決める条例制定の動きが広がり、2025年9月の段階で40都道府県/22区/390市/143町/12村、計607の自治体が条例を制定させている。(4)

ただし言語としての手話は、世界共通言語ではない。例えば日本語が英語と違う言語であるように日本特有の表現があり、日本語にも標準語があるよう

に標準手話がある。地域や文化的な違いが他の音声言語と同様に存在する。その差異は音声言語が同じ第一言語ではない他者同士が身ぶり手ぶりで理解し合うプロセスがある。ジェスチャーや表情などの所作全般で理解しやすくなる。日本で初めてプロの手話通訳者と言われている丸山浩路は、手話を「身ぶり語の約束事」と評した。(5) 言語がまだない時代に、他人同士が意思を共有するために、コミュニケーションとしての身体的表現を行ない続け、それが声(音声)を伴い、言語が成立して今があることを考えれば、約束事としての身体的表現は音声言語成立以前に人間らしさが成立したヒトの歴史の初期体系でもあると言えよう。さらに言語とは極めて視覚的なものであり、人同士の感性、共感性に寄り添い続けたものである。よって、手話は視覚的な言語として単に手を動かして話をするだけではなく、かといって、音を排除するわけではない。手話歌は、リズムやメロディ、歌詞を伴った表情やジェスチャーを意識して歌うことで、より豊かな表現を手話に与えている。

3-2 インタビュー内容

以上のように多様化した手話・手話歌に対する解釈が行なわれる2025年現在において、この「花は咲く」を自主公演で選曲した理由と同曲を特に子供たちと一緒に演じた意味を知るために、これまでインフォーマントとして協力いただいている新井氏に加え、「花は咲く」の手話歌の担当である野中氏に質問紙調査及びデプスインタビューを行なった。質問紙調査は2025年3月13日、デプスインタビューは①2025年7月20日19:00~21:00と②2025年8月31日12:00~14:00に実施した。特に②の際には野中氏の娘、里桜さんに参加していただいた。彼女はちんどん鈴乃家に小学1年生の時から参加し現在中学3年生にして正式メンバーになっており、自主公演の際に子どもちんどんを率いて手話歌を実演したメンバーである。

調査から分かった選曲の動機を次に言及する。野中氏と復興応援ソングとしての「花は咲く」との出会いは、自身の出産と育児に大きく関わっていた。野中氏は2011年の3月に第一子を出産した。その1週間後に東日本大震災が起こり、我が子を抱えな

がらテレビ越しにその光景を見て、「命とは何か?」「生きるとは何か?」を自問していた。それからテレビで「花は咲く」が流れはじめ、それを聴いた。これが曲との出会いだったということだ。そして、手話歌の「花は咲く」を披露したきっかけについては、子どもの発語が遅かったこと、そして同じように発語のない子どもを育てる友人が、子どもとのコミュニケーション手段として手話を用いようとしたものの、子どもが手話に興味を持たずに困っていると相談されたこと、この2つが動機となっている。東日本大震災後の自分の経験を活かし、手話歌をパフォーマーとして披露することで、その手話歌を観た他の人に何か役に立つことが出来たらとコンサートやソーシャルネットワークサービス(SNS)で披露するに至ったが、この段階では、ちんどん文化と手話歌との関連性はなかったということだ。

それでは、ちんどんと手話歌が結びついた瞬間とはどこであろうか。野中氏の友人が子どもとコミュニケーションを取る手段として手話を選んだ理由にもなるだろうが、定型発達の子どもの発達の遅れがある子どもにも、手話は有効なコミュニケーションツールとなる。なぜならば、手や表情や身体を通して情景をふまえ表す手話は、音声言語が成立する前のまさに人間が人間として進化する過程の身振り語の約束事であり、言葉となるからである。発語のない子どもに対しては発語へのアプローチ、もしくは母(相手)との共感の獲得に効果がある。ここで、インタビュー調査の中で、特に2025年8月31日実施分の野中氏と娘である里桜さんとのインタビューに焦点を絞り、質問と答えを一部引用したい。(質問者は太田、回答A欄文末のアルファベットはそれぞれ、R:里桜さん、N:野中氏とする)

Q1: ちんどんをはじめたきっかけを覚えていますか。

A1: はい。お母さんがまずちんどんをしていて、お父さんと何度も見に行っていました。その時、お母さんが違う世界の人みたいにキラキラしていて、自分もちんどんをしたいと思います。幼稚園の年長さんのときに、「将来の夢は、ちんどん屋さんになりたいです」と言

ったのを覚えています。R

Q2：ちんどんをしていて大切なことはなんですか。

A2：ちんどんはステージがあります。人前に出た際に、お客さんの顔を必ず見ることを大切にしています。お客さんはいろんな表情をしていて気になるけど、「何しているのかな」って楽しそうに肯定的に見てくれている人を見つけ、その顔はよく見るようにしています。R

Q3：ちんどんの演目で手話歌をすることについてどう思いますか。

A3：手話自体はもともと少ししていたんですが、最初はやっぱり手話を歌と一緒にすることが想像できませんでした。でも、実際ステージに出てやってみたら、お客さんが手話すごかったよ！と言ってくれたので、嬉しかったです。私にとって、ちんどん屋としてステージに立つ際に武器のひとつになるんだと感じました。R

Q4：手話歌「花は咲く」についてはどのような考えを持っていますか。

A4：歌詞を想像して、風景とか色とかを想像して、「きっとこんな感じなんだろうな」って感じながらやっています。例えば「真っ白な雪道」という歌詞がありますが、この人（歌詞の主語）はきっとこういう気持ちで表現しているんだろうなって。R

Q5：手話歌はあなたにとって、どういうものですか？

A5：手話は耳が聞こえない人のコミュニケーションのひとつだと思っています。手話をすることで、自分を相手に伝えるための表現が広がり、伝えられる相手も広がります。ちんどん屋としての自分をアピールできる可能性が大きくなるんです。手話歌をちんどんで披露することで、今まで自分とは関わったことがない人と関わって、例えば相手が聞こえない人

でも、ちんどんの動きや口上とかで、音楽って楽しいものだって伝えられるんじゃないかと思います。R

Q6：手話歌は耳が聞こえない人からどう思われていると思いますか？批判はこれまでありましたか？

A6：里桜の手話歌はすべて私が振り付けていて、SNSのTikTokに手話歌をのせていました。すると、ある日ろうの人から「これ（手話）は言語であって踊りではない」というコメントをもらいました。ろうの人と聴者とが共に楽しむことができる、ごちゃまぜの世界を作りたいと始めたことなのに、結局ろうの人を怒らせ悲しませる結果となってしまいました。そこから新たな動画をアップすることが出来なくなって、TikTokの更新は今でもやっていません。でも最近、里桜のステージを見続けて、手話に興味を持っている人が増えています。里桜がステージで手話歌を披露することで、いいねって言ってくれる人たちがいる。これは、ろう者と聴者をつなげる何かきっかけになっていることに違いありません。それなら次に何を私がしたらいいかという、言葉として手話を正しく里桜に伝えるということです。何種類も手話ってあるんです。その手話を勉強して、ひとつの手話歌を作っていく。そうすることで、観る人たちが「この子はきちんと勉強して理解したうえで、手話歌をやっている」と理解してくれる。こういうところを落とさずとどろとしていきます。そして、里桜が楽しんでやっていることが私にとってはもうひとつのポイントです。今はろうの人が喜んでくれることになる、と信じて手話歌をちんどんでやっています。N

3-3 考察

ここからは上のインタビューをもとに考察をする。なお、文中の番号は上の質問紙番号に対応している。

1に関して野中氏によると、幼少期の里桜さんはピアノ教室に行っても集中が続かず、ピアノに向き

合わないことに加え、泣き続けてレッスンができず、そもそも音楽に興味を持っている様子はなかったようだ。しかし年中まで発語がなかった里桜さんが、母親のちんどん屋としての姿を見続けることで、年長の時には爆発的に発語が増え、卒園前に初めて自分で何かを決定する意志が芽生えた。その瞬間が「ちんどん屋になる」という夢をもったタイミングである。以上のことから、身体的表現のひとつとしてちんどんが例えそれが受け身の形であろうとも、子どもの発語に、そして情緒面の成長という点に効果があったことが分かる。

さらにそれを表現の段階に進むことで裏付けるものが、2で示されるような他者の表情を識別し且つ共感性を獲得することである。実演を通して他者が自分の実演をどのように受け取っているのかを解し、自分にとって肯定的な表現者との絆を強くすることは、実社会において大切なコミュニケーションスキルである。パフォーマンス＝他者を再現すること(6)という視点もあるように、ちんどんを演じることは、全く自分とは違う自分を、同じ空間を共有している他者にみせているということだ。そして、その他者の視線さらには表情や身振りを認識し、相互間の変動的なコミュニケーションを通して他者の再現を完成させていく。その際に、3・4・5の回答を鑑みても、手話はちんどん屋として武器のひとつになるし、他者を再現、表象する想像力や楽しさを掻き立てるのである。

しかし、【2. 楽曲「花は咲く」と自主公演演目「花は咲く」】で述べた課題には留意が必要である。すなわち、手話を手話歌として演じる行為の正当性である。生きるための言語ツールとして手話を使っている人にとって、手話歌のエンターテインメント性は肯定的に受け取られるのか否かという問題だ。

コミュニケーションバリアフリーを推進するNPO法人「インフォメーションギャップバスター」代表でろう者でもある伊藤芳浩は、手話の種類がろう者のコミュニティで育ってきた独自の言語「日本手話」と日本語の文法に基づいた「日本語対応手話」を始めとした多様な言語として成立しているため、手話歌で用いられる手話を言語として使用していない人にとっては、言語として届かない事実を説明している。この事実は耳が聞こえない人の言語が、

耳が聞こえる人にとってのみエンターテインメントとして成立していることで、手話を言葉としている当事者を除外したものになりかねないと伊藤は指摘している。(7) この指摘はコーダ(親がろう者で自らは聴者)の五十嵐大の非手指標識を聞こえる人が無視しているという指摘ともつながる。「聴者が聴者を感動させるために手話という言語を消費する」(8)という五十嵐の言及は、手話は眉、目、顎、頬の動きにも意味付けを行ない、その手話の特徴を無視した歌手の表情が、耳が聞こえる人のみに共感を与える表情であり、その表情の意味を言語の一部として想定する人には、混乱や誤解を招くものになりうるという懸念の根拠となっている。

手話歌を演目としてステージで観客に見せる行為、インターネット上で不特定多数に届ける行為、これらの行為は手話に関わる人全てに肯定的に受け取られることは難しいであろう。しかし、野中氏が6で語った「言葉として手話を正しく伝える」という思いは、確実にちんどんの基本である情報を伝える広告業としての基本に立ち返ることになる。正確な情報の伝達に、見るものをどれだけ夢中にさせることができるのかが、ちんどん鈴乃家の継続を保証するものともなるであろう。言語教育としての手話歌の可能性は、ちんどん文化の中に確かにある。そのためには、まずはちんどんの実演者であるメンバー自体の楽しみも不可欠であり、野中氏にとっては次世代の鈴乃家を支える中学生の里桜さんへの手話の教授である。



幼少期の里桜さん（左）と野中氏（右）



イベントで披露される母と娘による手話歌

ちんどん鈴乃家の手話歌の取り組みは、手話歌の言葉と身体的表現を同時に習得する特性が、ちんどんの音とリズムの特性と合致している。現に野中氏は、意思を表情や体の前後の動きも含めて表現する

手話歌は、言葉の理解・コミュニケーション能力などに有用性があるため、ちんどんのワークショップやイベントなどで、手話歌を言語習得過程の幼児や児童に教えていると回答している。その発展形として「おまつりとみっく」と里桜さんの手話歌が実践されている。今後この両者の活動が融合するのか、差別化されるのかは、メンバー内の言語習得の結果にかかっているのかもしれない。

4. おわりに

今回、鈴乃家が「花は咲く」を手話歌として披露した理由を調査する段階で、ちんどん文化が子供に与えるパフォーマンス効果を手話により高めることができる可能性と同時に、子供の言語習得に手話歌を言語として認識する必要性も考察した。そして、ちんどんが宣伝業から芸能として形態を多様化している現在において、手話歌はまさに身体表現を用いて情報を、そして人の思い＝心を伝える宣伝業としての機能を維持、むしろ向上する可能性も検証することができた。

今後は継続的な子どもを対象としたワークショップへの参与観察及びその考察を行なっていくにあたり、お客へのインタビューや子どもちんどんの実演者へのインタビューも実施し、ちんどん鈴乃家のオーラルヒストリーを多角的に深めていきたい。

謝辞

今回の研究にご協力いただいた、ちんどん鈴乃家の女将新井理恵子様、野中真由美様、野中里桜様及び関係者の皆様に感謝申し上げます。

文献, 参考 URL

- (1) 阿部万里江『ちんどん屋の響き——音が生み出す空間と社会的つながり』世界思想社、2023、p.17
- (2) ちんどん鈴乃家 Official Homepage
<https://chindonsuzunoya.jp/>
(2025年9月7日最終閲覧)
- (3) 南留花『この手が僕らの歌声になる～きこえないけど歌いたい』ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス、2001、p.16
- (4) 一般財団法人全日本ろうあ連盟ホームページ
<https://www.jfd.or.jp/sgh/joreimap>
(2025年9月7日最終閲覧)
- (5) NHK「課外授業ようこそ先輩」制作グループ『丸山浩路クサさに賭けた男：オンリーワン！それが halo だ（別冊課外授業ようこそ先輩）』中央出版、2000
- (6) 吉見俊哉・北田暁大編『路上のエスノグラフィ ちんどん屋からグラフィティまで』せりか書房、2007、p.113
- (7) 日本財団ジャーナル「なぜ手話歌にモヤモヤする？ 手話文化の前提を知るため、ろう者に聞いた」
<https://www.nippon-foundation.or.jp>
(2025年8月24日最終閲覧)
- (8) 五十嵐大『「コーダ」のぼくが見る世界——聴こえない親のもとに生まれて』紀伊國屋書店、2024、p.273